

震災記念日

2021年は、2011年の東日本大震災から数えて10年目の節目でした。いくつかの場所で記念イベントが計画されていたと記憶しています。大学でそのような案内メールが届いたときに、震災の記憶を呼び起こし、得られた教訓は生かされてきたのか？を考える機会を、“記念”イベントと称するのは見識にかけるのではないか？という意味のメールを発信しました。1997年の兵庫県南部地震後に震災に関するイベントに“記念”というかむりをかぶせた行事に対して、住民からクレームがついたことから、それ以来マスコミは、震災記念という用語は使わないことにした、という報道を目にしました。そのためか、2011年以後でも、マスコミの報道にそのような表現は見当たらないようです。

大学でのオンライン上の議論の中で、併せて、Anniversaryと銘打つのも適切ではないのでは？という思いも付け加えました。ただ、これは、筆者の認識不足で、Anniversaryについては、Anniversary of birth（生誕記念日）もAnniversary of death（死亡記念日）もあることを知らされて少し反省をいたしました。ただ、“生誕記念日”はいいとして、“死亡記念日”というのは、日本語の感覚としてあまりなじみ良いものではないのではないかとと思うのですがどうでしょうか？関連して、「終戦記念日」はあっても「開戦記念日」というのは聞いたことがありません。ただ、「終戦記念日」についても議論があり、NHKは、「終戦記念日」を「終戦の日」と表現しているようです。

記念日に関連して、x x周年という表現がありますが、1997年に兵庫県南部地震に見舞われた兵庫県では、「記念」とともに、阪神淡路大震災の遺族の方に配慮するという形で2014年からは「周年」という文字を用いないことを決めたとのこと。「周年」は、本来、慶事にも弔事にも両方に使われるものですが、主に慶事に用いられると仮定すると、震災10周年記念日というより、震災10周忌ではないか？という気がしますどうでしょうか？NHKの放送用語の解説では、

放送では、悲惨な出来事や災害(震災)などが絡んだ節目の日には、原則として「～周年」という言い方はしないで、「～から〇〇年たちました」のように表現を工夫しています。

とあります。見識のある判断だと思います。

要は、研究機関や関連学会の災害に関連するイベントが被災者の立場に立っているのか？という問いに答えられていることが必須で、そのことが被災者に伝わるのが重要であると考えています。このことが災害を“ワガコト化”，そして，“ワレワレゴト化”することにつながるものと信じています。

「サラダ記念日」（河出書房新社，1987）でデビューした歌人・俵 万智さんは、2011年の東日本大震災の後、沖縄県へ移住（現在は宮崎県在住）されたことで種々批判をあび

“子を連れて 西へ西へと 逃げてゆく 愚かな母と 言うならば言え”（1992，毎日新聞社）と詠まれています。結果的にご本人なりの“ワガコト化”になったのではないかと筆者は理解しています。

“あの無残 忘れたいけど 忘れぬ

寄り添うころ ただひたすらに”

（代表理事 安原一哉）